

実施設計委託業務等の執行方法について

	設計・施工一括発注方式 (DB (デザインビルド) 方式)	E C I 方式 (アーリー・コントラクター・インボルブメント) 方式	設計・施工分離発注方式
概要	<ul style="list-style-type: none"> 設計と施工を一括で施工者等に発注する方式 施工難易度が高い工事など、施工者の技術力が必要となる場合によく用いられる方式 	<ul style="list-style-type: none"> 設計を設計者に発注し、設計者は、別途、発注者が選定した施工者から技術協力を受けながら設計し、設計完了後、技術協力を受けた施工者と工事契約を結ぶ方式（ただし、不調となった場合は、入札等を行い、施工者を選定する。） 設計や施工の難易度が高いなど、発注者や設計者で仕様・施工条件の確定が難しい場合によく用いられる方式 	<ul style="list-style-type: none"> 設計は設計者、施工は施工者にそれぞれ発注する方式 従来から最も採用されている方式
メリット	<ul style="list-style-type: none"> 設計段階から施工者が参画するため、設計が完了する前に工事に必要な資材などの調達を行う先行発注が可能となる。 施工者の強みである施工技術や特許技術などを設計に反映させることができる。 設計と施工を施工者等に一括で発注するため、責任の所在を1社に集約できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 施工計画の事前検討が可能となり、工事の着手がスムーズになるなど、事業スケジュールの短縮につながる。 施工者の技術力を活かした合理的な設計を行うことで、設計段階から施工を見据えた品質コスト、スケジュールの管理が可能になる。 設計上のメリットや品質を維持したまま、材料や工法を変更するなど、建設コストの縮減を目的とした協議がタイムリーにできる。 	<ul style="list-style-type: none"> 施工者の選定において、設計終了後に行うため、競争原理によるコストメリットを最も享受できる。 設計者の自由なデザイン性を十分に発揮できる。 設計と施工が分離しているため、責任の所在が明確である。
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> 施工者が設計と施工を一括に行うため、発注者は工事費の妥当性が検証しづらい。 適切な施工者を選定するためには、高い発注スキル・ノウハウが必要になる。 コスト重視の設計に偏りすぎ、品質やデザイン性の低下を招く場合がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 設計完了後に技術協力を受けた施工者と工事契約を結ぶため、施工者の選定や工事契約などに対する発注者の負担が増える。 施工者による技術協力の業務範囲と、設計者による技術協力の業務範囲が重なるため、事前に役割分担を明確にできていなければ、責任の所在が不明瞭になるなど、トラブルにつながる。 別途、技術協力費が発生する。 	<ul style="list-style-type: none"> 設計者、施工者それぞれの選定プロセスが必要になるほか、工期短縮の余地が少ない。 設計後に施工者選定を行うため、施工者の技術力を設計に活かせる余地は少ない。